

せたかむい

発行・古平町史編集室
古平町文化会館 ☎ 42-25590
第122号・平成11年11月1日

年表で読む

古平の歴史

《30》

■蝦夷地を北海道と改称

国内の情勢は大きく変わり、徳川幕府から明治新政府に政権が移って、慶応四年九月八日（新暦では十月二十三日）、年号は明治と改まりました。

明治二年（公）七月八日（新暦・八月十五日）、開拓使が設置されると、八月十五日（九月二十日）には、それまでの蝦夷地は北海道と改称され、十一の国に分けられ、次の郡は開拓使の直轄となりました。

札幌・上川・厚田・忍路・余市・古平・美国・積丹・古宇・岩内・寿都・上磯・茅部・亀田・三石・幌泉の十六郡

ほとんどはその当時、いずれも鯨漁や鮭漁、こんぶ漁などで繁

栄した土地でした。

函館周辺にまで飛び火した戊辰戦争が、幕府軍の降伏でようやく終わったのがこの僅か二か月ほど前のことでした。

■古平開拓出張所

明治二年十月十二日、札幌に開拓使の本庁を建設することになっていましたが、それまでの間、銭函に開拓使仮役所が置かれることになり、後志国の九郡（寿都・歌棄・岩内・古宇・積丹・美国・古平・余市・忍路）がその管轄となり、古平郡にはその出張所がおかれることになりました。

古平開拓出張所は運上家の建物を借りて業務を始め、出張所には少主典北川誠一以下六人が

詰めていました。

■古平の戸数

明治六年、元金沢藩士であった林顕三という人が、石川県の命を受けて樺太・北海道を巡回し、視察したことを日記にまとめて、明治七年、『北海紀行』として出版しました。

この中に、古平郡内の戸数について書いています。

沖 村	二十八戸
沢江村	二十六戸
垂美村	三十九戸
群来村	二十八戸
歌棄村	三十戸
浜中村	百二十四戸
谷地・入舟町	三十五戸
計	三百十戸

■岩村判官の巡視

明治五年、開拓使札幌本庁管内・西部方面の巡視に向かった*岩村通俊判官は、明治六年一月十一日余市に宿泊し、翌十二日に雪の山道を越えて古平に来ました。その時の日記があります。

札幌管内西部巡廻日記

（原文の要点を現在の文章に書き直しました）

一月十二日

七時出発、午後二時古平着、出張所の者が宿に来たので、明朝、用談することを伝える。

同 十三日

八時に出張所へ行く、貸付けた漁業資金の回収状況が良くないので、随行者に監査をさせることにした。

同 十四日

海上が穏やかなので、古平を朝九時に船で出発、十時に美国着、昼食の後、積丹に向かい四時着。（十五日、十六日略）

同 十七日

美国を朝五時出発、七時古平着、諸件について取り調べる。

同 十八日

書類の検印も済み、書類を持って十時出発、三時余市着。

*判官は開拓使では長官・次官に次ぐ地位で、当時は二人。岩村通俊判官は後に初代の北海道庁長官となる。

明治五年十一月九日（十二月九日）、太陰暦（旧暦）を廃止して太陽暦（新暦）現在の暦を採用、明治五年十二月三日を

明治六年一月一日とする。

2/17 今日珍しく暖気で春らしくなった。崎長、八へ漁夫が来た、そろそろ漁場も賑やかになる。夜、玉突きに行くが、だんだん上手になった。

2/21 昨日からの時化が続いて余市通いは休んだが、小樽通いが来た。夜、八時から支店で火防組合役員会がある。

2/25 富丸が余市から漁夫を乗せて来る。これで古平の漁夫もたいてい揃ったようだ。

2/28 すずりの墨もおこった。二月の末だというのにこんな寒さも珍しい。吹雪と寒さで今日は店もひまな方だ。十一時から役場で漁船の遭難予防法、氣象学の講話があるので行く、三時に終わる。夜、玉の湯へ行く、相変わらずの連中が来ていて話はずむ。

3/1 夜明けから大吹雪、二階の部屋にも雪が吹き込む、寒中のような寒さだ。

3/2 今日吹雪が続いている、それでも客が来て店は忙しい。美国から来た客が、美国では二十銭安いと言っているがどうも客の言うことは信じられ

ぬ、この吹雪に遠いところから来て、二十銭も高い物を買うわけがない。漁期が近づいて来たので、この日は刺網合計七百五十間ほど出た。夜に入っても吹雪は止まず寒さも厳しい。

3/3 長い荒れもようやく晴れ上がり青空を見た。漁夫も全部揃ったのか町中は実に賑やかである。今日はガンズ網も入れて千八百間出た。建網百間百五十円で八へ売った。

高野名幸作さんの日記から

当時の世相を見る

【23】

3/6 ガンズ網、刺網で千間出た、今年はあと一万間売りたい。刺網で奮闘した甲斐が見えてきた。自分の目標が達成できたのはうれしい、今後も油断せず発展させねばならぬ。

3/7 浜はだんだん賑やかになった。父が畳表を売って見たいと言っていたので注文した品が届いた、成績は如何。

3/11 野塚から来た人に二

百間売ったが、これから背負って帰るのだというので、昼食を出す。十二時半ころ帰って行ったが、あの山中大変なことだ。二時ころ来岸からの客も来た。今日も七百間余り売れた、商売は勉強が第一で、店はありがたいものだ。

3/12 もう網の方もおしまいかと思っていたら、刺網のほかに建網の注文もあった、五百間出た。浜では漁の準備も進み、

浜の田岸、そのほかで網下ろしだとか、浜には旗などが立って賑やかになった。

3/17 快晴の天気だ、上なぎで本陣の浜では型入れだといふので、三半船三隻に石などを積んでいる。「キ、崎長、上田などでは網下ろしというので旗を立てている。刺網も忙しい、いよいよ戦闘準備だ。

3/18 昨夜、群来村方面でガンズが沢山掛かったというので、ガンズ網を買いに来る客が多い、三百間ほど売る。浜に出て見ると⑦では投網している。

3/20 恵比須神社で、火防組合長^田支店主人の辞任について協議があるので行く。

3/21 快晴で春らしくなった。昨晩は時化模様で網を揚げたところもあるという。金魚売りが来たので十銭で四匹買う、子どもらは大喜びだ。

3/22 昨夜、中の建網で初鯨一尾揚がる。

3/25 雪で大時化、夜、本支店へ火防組合長改選の立ち会いに行く、^田山崎さんが当選。

古平の名勝地

霊場 観音滝ものがたり

《4》

▽道路の整備から

その当時は「ドロノキの滝」ともいわれていましたが、滝についてはその付近の農家や、山に入る人たちの間で知られていくぐらいました。山林などの仕事で山へ行く人たちは、滝へ通じる泥の木川の川ぶちを通っていましたので、人の歩く程度の道はできていました。

しかし、霊場として人を呼び集めるには不備なので、まず道路の補修にかかることになりましたが、差し当たっての資金も乏しいことから、泥の木部落会にその協力を頼みました。

部落では霊場の建設を歓迎し、また、信頼のあつかった禅源寺住職・岳轉和尚の依頼でもあり、泥の木方面に寺の山林や田畑などもあったことから、部落民は総出でこれに協力をしたのです。

道路の一部には砂利を入れ、道端の草を刈るなどして、稲倉石鉦山へ通じる町道から入り、約一・七キロにおよぶ道路は、地権者の協力もあってどうにか補修することができました。

▽『観音の滝』命名式

いよいよ準備も整って八月三十一日、天長節のよき日を記念し、この日、観音像一体を安置して『観音の滝』命名式が行われました。

このことを当時の小樽新聞は、写真も載せ次のように報じています。

「(略) 秋田導師(秋田岳轉和尚)はじめ米田助役、高橋営業所長、祝聖会員ほか一行三十名は、午前八時禅源寺を出発、九時半到着、祭壇を飾り、秋田導師により一同観音経を読経し、観音の滝と命名した。それより一行は用意の打ち網でヤマ

べを獲り、即席料理で酒やビール、弁当をひろげ、追分、尺八の合奏など、種々のかくし芸を演じた。宴の終わりに秋田導師からのあいさつがあり、今後のことがあるので、米田岩吉氏(古平町役場助役)を幹事長に推薦することが決まった。米田幹事長は、この地を将来古平名所とするべくその所感を述べ、

本日の泥の木部落の方々の労力に深謝し、天皇・皇后両陛下の万歳三唱と、観音の滝万歳を唱えて二時ころ下山した。途中、泥の木の木村彦松氏宅にて、部落会長工藤富五郎氏らと共に祝杯をあげ、一同帰宅したのは六時ころであった。」

〈観音の滝命名式当日の記念写真、浜町・森下写真館撮影〉



遙かなる故郷の思い出

わが闘病生活 ⑩

[60]

橘 義 春

八月二十一日（水）

午前、MRI（核磁気共鳴画像）検査、女医の堀先生がご自身で私の車椅子を押して、MRI室まで運んでくださった。途中、MRIの機械について堀先生から説明があった。この機械は特に脳梗塞の診断に有効でCTスキャンに映らないような脳梗塞の場所まで見つけられるとのことである。欠点は何億円もするという高価なことと、大音響を発することだという。なるほど、機械の中に入るとまるでドラム缶に入って、外からハンマーでガンガン叩かれているような、物凄い音がするのには驚いた。このうるさい機械の中に三十分ばかり入っていたらしいが、この中で、私は居眠りをしてしまい、これには堀先生もびっくりしていたようだった。

午後、脳血流シンチ検査（核検査）をする。

八月二十二日（木）

午前、心電図検査と採血検査をする。私も歳が歳なので、入院の心構えとして、初年兵のつもりで何事も謙虚でいよう、言葉づかいに気をつけよう、敬語を忘れずに。先生、看護婦さんヘルパーさん、掃除のおばさんにも、「ありがとうございますました」「ご苦労さまでした」「すみません」の感謝の言葉を忘れずに——と。

こんなこともあった。杏林大学には若い地方出の看護婦さんが大勢いる。いつも回ってくる看護婦さんが、突然、「橘さんは、会社のお偉いさんですか。」という。

「どうしてですか。」

と聞くと、

「いつも本を読んでいるか、書き物をしている。それに言葉づかいがちがう。」

と、きたもんだ。
「とんでもないです。二十年くらい前なら、或る出版社の取締役をやったこともあるが、今は年金生活のただの爺ですよ。いま書いているのは、北海道の私のふるさとの町役場で、月一回発行している『せたかむい』というミニコミ誌の原稿です。投稿してから六年ぐらいになるかな。私は字も下手で文章もまづいが、むかしお世話になったふるさとの誰かに読んでいただければ、と思い、文章を書いております。文字を書くということ、は、私たち老人のボケ防止にもなるでしょう。脳梗塞のリハビリにもなると思っていますがどうですか。」

言葉づかいに気をつけていたら、若い看護婦さんに、礼儀正しい会社の社長か重役にまちがわれてしまった。
もう一つ、病院の食事のことが、入院して一週間も経ったころ、病院の食事がのどを通らなくなってきた。これは脳梗塞の後遺症なのか、何を食べてもうまくない。出された食事の半分も食べられない。家内が持ってきてくれる梅干しが頼りで、やっと、お茶とともにのどへ流しこんでいた。
ところが、日曜日の夕食に出されたおかずが、紅鮭を薄切りにして焼いて、甘酢をかけたものだった。どうせうまくもねえ代物だと思っていたら、それがなんとうまいのなんの、絶品だった。マリネという料理だそう。こんなうまいもの、食べたことがないと思うほどうまかった。私があり「うまい、うまい」を連発するので、隣のオッサン、それほどもないよってナ顔して食べていたっけ。

—— つづく ——

断章小説 【ふるさと遙か】

想 思 樹 の 丘

IV

土 口 川 義 雄

「なんてえことを仕くさるんだあ——。」それは、惨憺たる光景であった。

飛行場防衛ということ、陸軍の部隊がこの辺りに入って来たことは知っていたが、相思樹が美しく森をつくっているこの丘陵地帯は、島民たちの神聖な墓地であったのだ。

昨日、特攻で散った平田と彼はこの丘が好きで、ここに来ては来し方青春の想い出話をしていた。

とりわけ、北国の白樺そっくりの木が「相思樹」という名であることを知ると、無性にうれしくなって、二人ともこの丘が大好きになっていた。

南国の墓地は、美しい芝生の丘に、炎暑をさえぎる相思樹の葉陰で、静に安らいでいた。

平田の機影が夕映えの空に消

え、その翌日、偵察機「彩雲」が撮影して来た、特攻戦果の写真を司令部で見せつけられてから、彼の生命は、全身から血を噴き出して暴れたい思いにさいなまれていた。

彼は、逃れるように、相思樹の丘に駆け上がった。

この墓地の墓石は、そのどれもが、翼を広げて家族を護る白鳥を思わせる、優しい姿と、平和な佇（た）たずまいをしていた。——数日前までは——それが、彼の今見る姿は、血の氷るような恐ろしい形に変貌していたのだ。

無残にも、墓を掘りおこして取り出した骨壺（こつ）がころがされ、そこから投げ出された骨片のおびただしい量が、芝生の緑をうめて散乱していた。

そればかりか、墓地全体に地

下壕（かこう）を掘ったらしく、墓石は格好の弾（たま）よけに見立てられ、中には銃眼（じゆうがん）まであけられたものもあり完全に野戦陣地（のせんじんち）に変わり果てていた。

彼は、野獣（よじゆう）のほえるような声を張りあげて叫んだ。

「誰（たれ）がこの馬鹿（ばか）真似（まね）をやったア出て来い——。」

自分を制御（せいぎよ）できなくなった彼は拳銃（けんじゆう）を取り出していた。出撃直前の平田（へい）田（でん）が、

「俺（おれ）には要（い）らなくなった」と

と言って、彼に渡した、形見となったブローニング三五口徑（こうけい）だった。そこに敵（てき）でもいるかのよう（よう）に、彼は天空（てんくう）に向けて引き金を絞り続けた。

故郷（こきやう）は遙（とほ）かな空の下に遠（とほ）かった。人が人を殺（ころ）し合う戦場（せんば）に、俺（おれ）は何（なん）で来（き）ているんだ。拳銃（けんじゆう）の轟音（ごうおん）の中で、彼の生命（せいめい）はオイオイと泣（な）いていた。

戦争（せんそう）の馬鹿（ばか）さ加減（かへん）は、止まることを知らなかった。

「今度（こんど）の戦争（せんそう）はだめね。」指令部（しんけいぶ）で傲然（ごうぜん）とうそぶく将校（しょうがう）を彼はブチのめしてしまいたかった。胸（むね）につけた金筋（きんすぢ）の上に、桜

の数の多いだけの人間（にんげん）を、彼は心（こ）から「この虫（むし）けらめッ」と軽蔑（けいべつ）し切（き）っていた。

異民族（いみんぞく）を蔑視（めいし）するような島国根性（しまくにんせう）は、いつから日本（にっぽん）で始（はじ）まったのか。ヤマト民族（やまとみんぞく）と、単（ただ）一の血類（けつるい）みたい（まい）に誇（こ）っても、北（きた）から南（みなみ）から遙（とほ）かな時（とき）を重（おも）ねてあ（あ）の島（しま）に人（ひと）が集（あ）い、同化（どうか）しただけであ（あ）る。

生（な）れ育（そ）ったその国（くに）を、彼（かれ）も愛（あい）して止（とど）ま（ま）ない。祖国（そこく）を離（はな）れて、白地（はくち）に日（ひ）の丸（まる）の美（う）しさに感（かん）動（どう）もした。しかし、他国（たこく）侵略（りくわく）の旗印（はたしるし）に使用（しやうよう）することは断（ことわ）りして許（ゆる）され（さ）れない。

小（こ）さな島国（しまくに）、限（かぎ）りない文化（ぶんか）の恩恵（おんえ）を遙（とほ）かな昔（むかし）から与（あた）えてく（く）れた国々（くに々）が、忘恩（ぼうおん）と傲慢（ごうまん）と化（く）したその島国（しまくに）から、苦汁（くじゅう）の蜜行（みつぎやう）を受（う）けているのだ。

愚（おろ）かな指導者（しうどうしや）に率（り）いられた国民（たみ）ほど哀（かな）れなものはな（な）い。戦争（せんそう）はい（い）つ果（は）てるともな（な）く続（つづ）いてい（い）た。硝煙（しょうえん）の漂（もよほ）う丘（かみ）で、彼（かれ）はふと遠（とほ）い故郷（こきやう）を思（おも）った。う（う）ずくよう（よう）に郷愁（きやうしゆう）が身（み）体（たい）中（ちゆう）を駆（か）けめ（め）ぐった。

——この稿（こう）終（しゆう）わり——

古平ホトトギス会

看護婦も主婦にもどりて栗拾う
 斉藤波留

無花果(いちじく)の甘露煮来ずや代替り
 山口悦子

羅(うすもの)の衣バイクになびきけり
 越野敏雄

忌日まで新種の菊を咲かせたし
 大和田絵伊

たんぼぼの絮(わた)を残せし秋日和
 福井幸平

積丹の見あぐる崖に鷹戻り
 仲谷美砂

積丹の浜を名残のキャンプ哉
 大島喜恵

漆の木紅葉鮮やか
 関口勝志

犬抱く初老夫婦の白い靴
 よしざき理

古平の味たしかむる鮭の鍋
 山口浪

街頭の童等声高き
 仲谷比呂子

築番の川瀬の音も見廻りす
 越野清治

湯上りの居間に程良き秋の風
 室谷弘子

古平町岬短歌会十月詠草

管内の老人大会にわれ参加す踊る女(おみな)らみな若々し
 榊佳代

窓に寄りときかけて爪を切るといふ母よすこやかにいませ霜月近し
 鈴木時子

お盆過ぎ二度目に咲きし鮮やかな桔梗の群青秋を運び来
 田中香苗

ざわざわと夕たつ風に葉擦れして尾花波うつ鬼が沢の秋
 竹内コト

大きな平目の魚拓を弟持ちて来ぬ初釣りなればと笑みをたたへて
 池田テル

膝の水大分退きしと言ひくれしに光り差すごと心明るむ
 奥山きよみ

欠けし人病む人多くなりたれど話す笑顔の若し同期会
 堀典子

解禁の鮭つる人ら古平の浜に河口に大勢並ぶ
 丹後初江

娘なきを常に嘆けどわれ病みて三人の嫁の看病(みとり)に和む
 菅原節子

栗拾うわが手に降りてたまゆらに消えてはかなき今朝の初雪
 山口スエ

——じいちゃんが見ているよ—— 孫とのきづな

渡辺 ハツエ

人生わずか五十年といわれた時代もありましたが、高齢化が進む今、私も何時の間にか喜寿を迎えて、八十年代ももう間近になりました。これからは心身共に健康で、楽しく余生を過ごしたいものと念じております。

私の暇な一時、去年、孫娘からの手紙を出して読んでみました。

「最近、地震が多くて心配です。もしものことを考えて、何時でも逃げられるようにちゃんと用意しておいたり、自分の身を守るように普段から訓練しています。」

またある時は、テストの話や成績のことなど、事細かに報告してくれるので心が和みます。

孫は、一日一日の時間を大切にして、充実した中学校生活を過ごしているようで安堵しました。

ところがある日、千葉県での地震のニュースが入りました。震度3とのことで、孫は千葉県に住んでいて、私は二人の孫のことも心配になりましたが、両親は仕事で不在ですので、家族が揃う夕刻を待ちました。

宝海寺の

同朋会

に参加して

竹内 コト

宝海寺の檀家である私は、毎年、春の彼岸明けの五月から十月までの、第一と第三の金曜日の午後七時からの、住職の法話に出かけております。

私は体が不自由なので、どこへでも出歩くということはありませんが、日ごろから親しくしている方々に支えられながら、

ころ合いをみて電話をすると孫が出て、地震のときは学校にいたとのことでした。元気な孫の声を聞いて、今までの心配もいっぺんに吹っ飛んでしまいました。大地震にならなくて何よりでした。電話が替わって、母親は車で走っていたので、地震には全然気づかなかったそうで、ご心配をかけました、と言っていました。

子どもたちは、何時でも何か困ったことが起きれば、仏様に

この法話を聞くのを楽しみにして、ずうっと休むことなく続けて行っております。その日の午後七時になりますと住職さんが見えて、どんなにお疲れのときでも、特別な事情のない限り、必ず皆さんの前に元気な姿を現します。いろいろと、私たちにとって有益なお話

なったおじいちゃんが助けてくれるから、と話しているそうです。

私は早速、遺影の亡夫に「孫たちを守ってください。」と、念じました。

をされ、集まるのは何も檀家の方だけではなく、どなたでもと住職は申されております。

まず『正信偈』（しょしんげ）というお経から始まり、『御和讃』（ごわさん）『お文様』（おふみさま）と続き、その後法話をされます。難しいことを分かり易くお話しされ、法事のこと、お墓のこと、内仏のこと、そのときどきの世の中の出来ごと、そして、いろいろな質問にも答えてくれます。知識の乏しい私には、またとない良き勉強の場です。集まった方々も熱心で、みなさん喜んで帰られます。改めて住職のお人柄が感じられます。

この会が終了する最後の日には、一同揃って夕食会が行われます。笹川の母さんや、亡くな

←（次ページへ続く）

柳川

北 政 道

石 井 愛 子

永田町ささやきもれるデノミ論
翼(みぞれ)降るきびしき冬を予感する
童歌老いには遠い遠い過去
まだらボケたそがれ族と言う呼び名
守るだけ護り攻めない第九条

慈しみ受けし米寿の姉在りて
老い三人笑いこらげて明日に生き
しつかりと転ばぬ様に老い二人
喜寿迎え八十路に手招きされている
孫の文婆待ちこがれ孤独です

渡 辺 ハ ツ エ

あとがき

ボヤキ

★浜町郵便局で「せたかむい」は発行してから何年になるんですか?」という会話から、「そうだった、今月で満十年だ!」早速、第一号を取り出して見たら、平成元年十一月一日発行となっていた。百号のときは、三枚・十二ページに増やしてひと区切りとしたが、今回もなにか企画を——と、考えていたところ、ナント異変が:~:

⑤六、七年来使っていたワープロが故障、画面が真っ暗になってしまった。少し前、買った

ばかりのパソコンをいじくりまわしている内にこわしてしまっただのか、ウンもスンもなし。これでは仕事が途切れてしまうので、安くいワープロを買ったが以前のような編集機能がなく、慣れてないので使い方にもとまどい、仕事はさっぱりはかどらない。原稿ばかりがたまっていく。今さら、昔なつかしいガリ版というわけにもいかないし——、しかし、その古典的なガリ版で、一度はやってみたいという気は大いにある。さいわい器具は持っているし、材料もまだ残っている。

⑥町内で会う方や、町外から

も「どうしたの?」と言われる始末。「病気でもしたのかと思つて:~:」とか、「まア、あわてないでがんばつて:~:」と、心配や激励してくださる方もおられたが、今のところ意欲だけは健在。

⑦新しい機種にも少しは慣れたところ、ようやく修理代ン万円でワープロが直ってきた。ヤレヤレと元氣も回復して早速始めたら、またまたドギマギ。歳と共に、物事に反応するのが鈍くなってきたことを痛感。

⑧何気なく十月の運勢欄を見たら、「心機一転の時、新しい物事を始めるのには好機。また

(前ページから続く)

られた越野スミ子さんたちの踊りや歌で、賑やかに私たちを楽しませてくれました。

この会には、以前は大勢見えておりました。年齢も進み、また、夜の行事ですので少し減ってきたように思いましたが、今年に入り、また盛り上がりを見せてきました。私も、これからも若い人に混じって続けていきたいとねがっております。

— 終わり —

× × × × × ×

自分の心の中の気持ちの引き締め、良い意味での変化がみられます:~:。やや意味不明だが、人は、その中のひとつでも思い当たると「当たってるッ」という心理になるから、これはこれでよし。

⑨ようやく、ひと月余りの遅れで122号を発行。年内にあと2号発行して、二十一世紀の初日を、晴れやかな気分で見たいものとながっている。

♡しまりのない「あとがき」になったが、遅延のお詫びに代えて閉じマス。